

テーオフ

椎野若菜さん (36)

社会人類学者

寡婦見つめ 女性の生き方探る

ケニア西部のルオ民族は、米国初の黒人大統領を目指すオバマ上院議員のルーツ。「父がルオで、親族が暮らす村へ「帰省」して話題になった。その社会を13年間調査し、初の著書『結婚と死をめぐる女の民族誌』を

ニア・ルオ社会の寡婦が男を選ぶとき』(世界思想社)にまとめた。

ルオ社会では、妻は夫を「しくしたら代理夫をもつことになつていて、父系の一夫多妻社会であり、一見、女性が従属的だが、実際は自ら代理夫を選ぶのをはじめ、限られた条件下ながら「女性の主体性が明らかだ」という。著書の柱は寡婦ら85人の聞き取り調査で、「一人一人に小説のような物語があります」。

現地滞在は通算2年半。土と牛ふんでできた小屋に住み、トウモロコシの練りがゆを主食に、おかずはあるかないか。マラリアで水も飲めな

くなるほど衰弱、40代で死ぬのが普通の「死と隣り合わせ」の社会を実感。一方で、実の娘同様に受け入れてくれた女性らとの暮らしから、複雑なしきたりの中で、ある意味、豊かに生きる人々の姿が見えてきた。

現在は東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所の助教。寡婦のあり方をアジアや欧州も含めて比較しよう、と他の研究者と協力して研究会を開き、編者として『やもめぐらし—寡婦の文化人類学』(明石書店)を出版。「今後は『シングル』という視点で比較したい」

晩婚化、高齢化、少子化の中で「負け犬」や「おひとりさま」が話題の日本。「従来の社会通念と違う生き方ができるのか。世界の人々を見ていけば、がんじがらめの日本人も、もっと楽に、人間的になれるのではないか。マラリアで水も飲めない

